

日本人大学生のEFL学習者コーパスに見られる MAKEの使用

The Uses of MAKE in EFL Learner Corpus of Japanese University Students

望 月 通 子
MOCHIZUKI Michiko

MAKE is a high frequency verb regardless of style and register, whereas GET is high in frequency in spoken English but low in written English. Both MAKE and GET are used as activity verbs and in causative constructions, and both are difficult for EFL learners since they are polysemous and light verbs. This paper compares differences in the use of MAKE in academic prose written by Japanese university students and by American university students with ICLE-J as the learner corpus and LOCNESS as a reference corpus. Results show that Japanese learners of English underuse causative MAKE as well as phrasal/PP MAKE but overuse idiomatic MAKE and that money MAKE and light verb MAKE are underused in MAKE NP constructions, with creative MAKE overused.

Key words

make, high-frequency verb, light verb, academic writing, learner English

1 はじめに

1.1 研究の目的

高頻度動詞の大半は基本動詞として英語のなかで不可欠な核心部分を形成しているが、これらの基本動詞には一般の動詞とは異なる特性が見られる。Altenberg & Granger (2001:173, 188) の指摘にあるように、おしなべて高頻度動詞は極めて多義性に富み、その意味範囲が広く、学習者にとってなじみ深いわりにはなかなか使いこなせない厄介な動詞であるが、通常は学習プロセスの初期段階で導入されるとそれ以降はほとんど注意が払われないことが多い。Ballier (2003:1) はこうした動詞はlight verb (軽動詞) 構文に使われることが多いと指摘しているが、Trask (1993:160-161) の定義を援用するならば、この種の動詞はそれ自身の意味内容がゼロ

表 1¹⁾ 高頻度主動詞の1万語あたりの出現頻度 (Ringbom 1999:193)

Word	NS	FRE	SPA	FIN	FINSW	SWE	DUTCH	GERM
MAKE	31	23	29	29	31	35	27	24
TAKE	19	17	13	18	20	22	12	13
SEE	16	14	10	15	13	16	13	11
SAY	15	18	20	18	12	14	16	16
GO	14	16	18	18	21	14	23	24
BECOME	13	20	12	18	14	13	20	9
BELIEVE	13	5	7	9	12	9	5	6
GIVE	13	12	13	15	15	13	14	15
FEEL	13	8	7	6	16	9	6	10
COME	11	9	4	9	13	17	12	13
FIND	10	12	13	11	14	15	12	14
THINK	9	28	27	26	35	34	20	28
KNOW	9	11	13	13	15	15	15	18
LOOK	8	7	8	7	10	9	10	13
SEEM	8	10	8	15	14	10	9	10
WANT	8	15	15	12	19	16	15	21
GET	8	11	25	28	23	24	21	31
LIVE	6	16	16	12	14	9	9	17
WORK	4	9	11	8	9	9	11	9
Total	248	270	287	306	337	321	291	322

か、ほとんどない。むしろ、Svartvik & Ekedahl (1995) が明らかにしているように、話し言葉／書き言葉、あるいはテキストタイプの影響を受ける可能性を考慮する必要がある。表1 (Ringbom 1999:193) は、大学生によるEFL論述文を構築したICLE (International Corpus of Learner English) サブコーパスに見られる高頻度動詞の出現頻度について、L1が異なるEFL学習者 (NNS) 間、そしてこれらのNNSと英語を母語とする大学生 (NS) 間の比較結果を示したものである。

表1を見ると、むしろ、過少使用する傾向がある高頻度動詞も散見されるが、おしなべて学習者はFIND、BECOME、THINK、GET、WANTをはじめとして多くの高頻度動詞を過剰使用する傾向が見られる。しかし、L1スウェーデン語EFL学習者以外の学習者はむしろMAKEを過少使用する傾向が見られる。LONGMAN GRAMMAR of SPOKEN and WRITTEN ENGLISH (1999:375) はレジスター別に高頻度動詞を示しているが、会話ではGETがトップで、これにGO、SAY、KNOW、THINK、SEE、WANT、COME、TAKEなどが続き、MAKEは第11位にランクされている。フィクションのトップはSAYで、これにGO、KNOW、SEE、COME、GETなどが続き、MAKEは第8位である。ニュースでも同様にSAYがトップでMAKEは第2位であ

る。アカデミック散文では GET や SAY のような特に際立った高頻度動詞はないが、MAKE が第 1 位にランクされている。本研究では高頻度動詞であると同時に軽動詞でもあるこの MAKE について、日本人大学生の EFL ライティングに見られるその使用のパターンについて ICLE-J サブコーパスに基づいて分析を行う。

本論文のリサーチクエスチョンは以下の通りである。

- (A) 英語 NS と比べて、L1 日本語 EFL 学習者の統語カテゴリー別の MAKE (MAKE+NP, causative MAKE, phrasal/prepositional phrase MAKE, idiomatic MAKE, other structures) の使用頻度はどうか。
- (B) MAKE + NP 構文の意味別の使用頻度はどうか。特に light verb の頻度はどうか。

1.2 基本動詞の特性

相沢 (1999:4-6) は基本動詞の中から中核的意味の上で対になる語を組にして come-go、give-get、put-take、make、be、do、have の 10 語を選定して分析を行い、これらの基本動詞の特性を以下のように述べている。

- (1) 形態的にも音韻的にも極めて単純で、語の長さとは反比例しているという Zipf (1935) の法則があるが、全て 1 音節 4 文字以内の長さで、主にゲルマン語系のこれらの little word に対して、ラテン語系の big word がある。例えば、have (possess)、get (obtain, procure, secure)、give (confer, donate, provide)、make (construct, manufacture, produce) などである。
- (2) be、do、have 以外は全て日常活動のなかで最も身近な基本的な動作を表し、典型的には空間内を移動する (come-go)、何かを移動させる (put-take)、何かをやりとりする (give-get)、新たに何かを作り出す (make) などで、これらは比喩的意味に拡張する土台として最適である。
- (3) 各語の中核的意味は身体動作であるが、多義的で意味が軽くなって (delexical)、主語と述語を結びつける働き、連結詞 (copula) に近くなる場合もある。
- (4) これらの基本動詞はほとんどが単純な基本的身体動作だけを表すのに対して、一般の動詞は動作の方向や対象、様態などの要素が組み込まれていることが多い。例えば、「入る」が go into と対応するなど、日本語はフランス語や韓国語と同様に 1 語の動詞に方向まで含む path-language であるが、英語やドイツ語は方向を示す語が動詞の外に出ている non-path language である。また「ぶらぶら歩く」が ramble に対応するなど、日本語は様態を動詞の外に出して別個に言う non-manner language であるが、英語は様態を動詞に含む manner language である (Talmy 1985, Wienold 1995 参照)。

1.3 light verb の概念

一般の動詞と比較して、基本動詞は形態的にも音韻的にも単純で、上述したようにlight verb構文に使われることが多い。light verb (Trask 1993:160-161, Huddleston & Pullum 2002: 290, Radford 2004:461) には、これ以外にも delexical verb (Sinclair & Renouf 1988, Collins Cobuild 1990:147)、deverbal noun preceded by a common verb of general meaning' (Quirk et al.1985:750)、thin verb (Allerton 2002) などの様々な呼び方があるが、本研究ではlight verb (以下、軽動詞) という名称を採用する。Pinkerは軽動詞の特性について次のように説明している。

In fact, there is a set of verbs that act something like a transitional case: the “light verbs” such as *come, go, make, be, bring, take, get, and give*. Syntactically they are full-fledged verbs, but semantically they are less filling, resembling closed-class elements. Their meanings are fairly nonspecific and may correspond to simple semantic configurations that are encoded into affixes in other languages (e.g., the use of *make* in the periphrastic causative) . They often function as little more than tense-carriers or verb-slot-fillers in idioms whose objects carry most of the meaning of the predicate (e.g., *make love; take a bath; go crazy; and most uses of be*).

(Pinker 1989:171)

語は「開かれた類」(open class) と「閉ざされた類」(closed class) に区別される。前者は成員の数が多く、次々に新しい要素が加わり得る類で、名詞、動詞、形容詞、副詞などが属し、一つの完全なまとまった意味を有している内容語である。後者は成員の数が少なく新規に加わりにくい類で、主として文法的機能を担い、語彙的な意味をほとんどもたない冠詞や前置詞などである。こうしたことからわかるように、機能語は数も限られているので必然的に使用頻度が高くなる。そういった意味で上例のmake loveにおける軽動詞makeは時制を表したり、受動態の過去分詞になるなど文法的な機能を果たすが、意味は目的語のloveによって表されており、動詞makeが特定の意味をもっているわけではない。同じ線に沿ってTrask (1993) は軽動詞についてもっと端的に “A verb with little or no semantic content of its own which combines with a (usually indefinite) direct object noun or NP which itself expresses a verbal meaning.” と定義している。このように軽動詞は意味的に軽く、動詞それ自体は何ら具体的な意味をもたない。言い換えれば、動詞の意味に対する貢献度は非常に少ないと言える。

ただし、通常構文と軽動詞構文を比べた場合、両文の意味は全く同じというわけではない。

(5) He **drank** my juice.

(6) He **had a drink** of my juice. (Huddleston & Pullum 2002:292)

文 (5) は「ジュースを飲んだ」という全体的な意味であるのに対して、文 (6) は「ジュースをひと口飲んだ」という部分的な意味である。

1.4 コロケーション

make は軽動詞構文でも多岐にわたる振る舞いを見せているが、軽動詞構文の延長線上には多くのコロケーションやイディオムの世界がある。コーパス言語学の世界では、その関心が語 (word) から句 (phrase) へのシフトが起こっているが、英語学習者コーパスも同じ方向をたどっている。

Our knowledge of a language is not only a knowledge of individual words, but of their predictable combinations, and of the cultural knowledge which these combinations often encapsulate. (Stubbs 2002:3) (訳: ある言語を知っているとは、個々の語を知っているだけでなく、予測しうるその結合形や結合形がしばしば内包する文化的知識を同時に知っているということなのである。(南出・石川 2006))

このように句の重要性がより強く認識されるようになってきたが、Sinclair (2005:21) は意味の主たる担い手は句であって単語ではないと主張している。Wong-Fillmore (1976) も、幼児はまず定型表現を習得して、それから定型表現を分解して規則を習得すると述べている。コロケーションの定義については、「語が共に出現する」(Sinclair 1991:170) という概念が多くのコロケーションの定義のコアになっている以外は、頻度、結びつきの強さ、制限要因、統語的つながり、意味の予測度、連続性と距離の6つの判定基準のどれを重視するかによって様々な定義が提示されている。Sinclair (1991) はどのようにテキストが構成されているかについて open-choice principle (自由選択原理) と idiom-principle (非選択原理) を提唱し、自由選択原理ではカバーできない制約が談話の語彙選択にはあり、言語使用者は単独で使える半固定フレーズ (semi-preconstructed phrase) を記憶して使用しているため、語彙共起には制限があり、多くの頻出語句が非語彙化 (delexicalized) され、実際の使用場面においては idiom principle が優位になるとしている。(Sinclair, 1991:144)

伝統的なアプローチでは句は次のように連続体をなして、主として3種類に分けられる。つまり、自由結合 (free combination) と制限的コロケーション (restricted collocation) とイディオムの三つである。イディオムはさらに細かく比喩的イディオム (figurative idiom) と純粋イディオム (pure idiom) の二つに分けることもできる。

(7) 自由結合 II 制限的コロケーション > 比喩的イディオム > 純粹イディオム

例を挙げると、自由結合は下位範疇化にあたるものでblow a trumpet、制限的コロケーションはblow a fuse、比喩的イディオムはblow your own trumpet (自画自賛する)、純粹イディオムはblow the gaff (嘲笑に耐える) などである (Cowie 2005:164)。

Granger (1998:146) や Nesselhauf (2003:224) は統語や語の結びつきによる制限ではなく、恣意的に組み合わせが決まっている場合のような慣習的な結びつきだけをコロケーションとしている。

コロケーションの教育的示唆としては、個々の単語をいくら身につけてもそれは言語学習には直結しない。先にも述べたように句単位で習得することで次の文生成の段階に進むことはそれほど困難ではないが、個々の単語から文生成に進むのはその間にいくつものステップがあって容易ではない。上級の学習者ほどコロケーションを習得しており、そのために母語話者らしい自然な発話ができると言われているが、それでも上級学習者が母語話者並みにコロケーションを使いこなすことは困難である (Bahns & Eldaw 1993)。また、De Cock et al. (1998) の報告では、上級学習者と母語話者の間ではコロケーションの使い方が異なるとしている。

個々の単語を習得してもそれらがどのような他の単語と結合できるかを知っていなければ非英語的な不自然な表現を産出することになる。native-likeな選択を身につけるということはコロケーションの知識を身につけるといふことにもなる。日本人学習者が英語がうまくならない一因は、上に述べた連続体の「自由結合」の域にとどまっていて、しかも日本語から類推できる範囲の「自由結合」から抜け出せないからであろう。例えば、自由結合において、動詞の後に続く目的語は特定の意味の名詞句が来るという情報がなければ、学習者は母語に基づいた推測か類推で語彙結合を作る傾向がある (Howarth 1998:163)。大多数の単語はある特定のコロケーションをもっているが、コロケーションの知識がなくては語句の産出も流暢さも望むべくもない。母語話者らしいコロケーション能力がないということがNSとNNSの違いを浮き立たせるのである。つまるところ、コロケーションが英語教育に示唆するところは、二つの語が共起するために適切な語彙を選ぶ語彙選択の重要性である。

(8) * How much and to what extent can one accept the findings reached by Gardner and Lambert?

Howarth (1998:162) によれば、この文は高度で複雑な文法構造を間違いなく駆使しているが、NSが生成しない非英語的な英語である。findingsとreachedが不適切な結合/共起をしているからである。

コロケーションはまた流暢さを助長してくれるものとしても論じられている。句はmulti-

word unit (略して MWU) とも呼ばれるが、MWU を習得していればオンライン処理が早くなる。

My model of the sociopsychological dynamics of formulaicity assumes that MWUs enable us to minimize our on-line processing, both as speakers and hearers. (Wray 2005:23)

コロケーションを学ぶことによって学習者はある語の次に使用され得る語を予測することが可能になり、単語を最初から一つひとつ並べるのではなくすでに出来上がっている言語表現を使用することが可能になる。換言すれば、同じ内容の英語を自分なりに組み立てるよりもはるかに時間的余裕が生まれることになる。従って、コロケーションの習得が高まるにつれて流暢さが高まることになる。

前にも述べたが、単語間の共起関係は緩やかな結合関係から固定された結合関係まで連続体をなしているが、最も緩やかな結合関係（共起関係）が自由結合で、最も固定された結合関係がイディオムであるが、その中間に来るのがコロケーションである。図式化すると、自由結合 > コロケーション > イディオムのような連続体を形成しているが、この三つは総称してフレーズオロジーと呼ばれ、学習者言語の分野でも精力的に研究されている。

1.5 makeの統語カテゴリーと学習者コーパスに基づく先行研究

Tobin (1993:46) では make を performative verb としているが、*Longman Grammar of Spoken and Written English* (LGE) では activity verb のカテゴリーに分類している。make と同様に高頻度の軽動詞である get, give, take など activity verb に分類されている。Get はアカデミック散文の使用頻度が make や give, take に比べると比較的低いですが、make, give, take はレジスターを問わず比較的高頻度で使用されていて、とりわけ make は顕著である (LGE: 367)。この make は ICLE サブコーパスでも高頻度動詞のトップであることはすでに 1.1 で述べた通りである。

以下、まず make の統語カテゴリーを、次いで学習者コーパスに基づく make の先行研究を概略する。使役、多義語、軽動詞の make とコーパス基盤型研究について概観する。

1.5.1 makeの統語カテゴリー

動詞 make には主として二つの機能がある。一つは「素材に手を加えて産物を作る」(create, construct, bring into existence) の意味で、「姿・形を変えて」という部分と「産物への焦点」の二つが重要な語彙の意味内容である。make を構成する図式には「作り手」「素材」「産物」の3項が含まれることになる。make には様々な意味があるが、ここでは統語カテゴリーの分析にとどまり、詳しい意味分類には立ち入らない。

- (9) He **made a pie** for the children. (Edwin 2006:26)
(10) She **made me realize** that I had been unfair to the little boy. (Edwin 2006:26)
(11) Television has simply **made learning easier**. (Edwin 2006:26)
(12) He was **made a fool** by his colleague. (Edwin 2006:26)
(13) John **made grapes into wine**. (田中他 2006:79)

文(9)では作り手heが産物a pieを作ったことを表す。また、makeは使役構文でも使用される。文(10)はmake+object+baseの使役構文であるが、通常、使役構文はcause something to happen またはforce someone to do something against their willの2種類の意味がある。使役構文にはこの(10)のような動詞構造以外に、形容詞構造、名詞構造、前置詞句構造がある。文(11)は形容詞構造の使役構文で、文(12)は名詞構造の使役構文である。文(13)は前置詞句構造であるが、grapesが素材であるのに対してwineは産物を表している。

1.5.2 makeの学習者コーパスに基づく先行研究

Altenberg & Granger (2001)はL1 スウェーデン語英語学習者とL1 フランス語英語学習者のmakeの使い方に焦点を当ててこの動詞に関して全体的なコーパス研究を試みている。そのほかの先行研究はSouesme (1999)、Gilquin (2000, 2001, 2006)、Altenberg (2001)、Nesselhauf (2003)などがある。Gilquinは、軽動詞のmakeやdoとこれに対応するフランス語の動詞であるfaireとの比較や使役構文を研究している。また、Altenbergは軽動詞のmakeとスウェーデン語göraの比較研究をしている。

1.5.2.1 多義語としてのmake

Altenberg & Granger (2001:174)では、高頻度動詞の特徴についていくつか列挙している。

- 高頻度動詞は基本的な意味を表すので、色々な意味分野によく出てくる。
- 高頻度動詞はたいていの言語においても同じようなものが存在する。
- 高頻度動詞は極めて多義性であるという特徴を有しているが、それは次の2種類の意味拡張に起因する。
 - 一般的、抽象的、軽動詞的、文法的な用法を持つ普遍的傾向。
 - 特定の意味、コロケーション、イディオムを持った個別言語的傾向。
- 高頻度動詞は簡単であると外国語学習者は思う傾向がある。

学習者は高頻度動詞を過剰使用する傾きが見られるが、軽動詞構文のように過少使用の現象も見られ、個々の言語に特有なコロケーションやイディオムをもっている。従って、英語のコロ

ケーションやイディオムは NNS の母語のそれとは異なることが多く、EFL 学習者にとってはとりわけ問題の領域である。Sinclair (1991:79) は次のように指摘している。

many learners avoid the common verbs as much as possible, and especially where they make up idiomatic phrases. Instead of using them, they rely on larger, rarer, and clumsier words which make their language sound stilted and awkward.

make の中心的な意味は「何かをつくり出す」であり、この意味で頻用されると考えられがちであるが、頻度数の高い意味は「創造」だけに限らない。たいていの場合 make の意味は創造とは関係のない意味で使用されている。make が多義的な性格の動詞であると言われる所以である。make の多義性について、De Cock & Granger (2004:235) は、make の中核的な意味は 18 種類あり、意味の序列では、COBUILD は軽動詞用法が最も重要であるとして 1 位にランク付けしている。OALD では軽動詞用法を 4 位にランク付けしている

1.5.2.2 使役の make と学習者コーパス研究

Gilquin (2001, 2002, 2006) は、主に迂言的使役構文 (periphrastic causative construction) を distinctive collexeme 分析法で分析を行っている。学習者には、過剰使用／過少使用、統語的な問題に加えて、構造的な結びつきの問題があることを指摘している。つまり make と non-finite verb の結びつきには、文法的には正しいが NS とは異なる非イディオム的な使役構文があり、迂言的使役構文のスロットと単語の意味の強い結合を教室内指導や教材で取り上げる必要があることを述べている。

1.5.2.3 軽動詞としての make と学習者コーパス研究

軽動詞は研究者によってまちまちなところがあるが、Altenberg & Granger (2001) は、V+N/NP 構文の中で V が動詞自体の意味をほとんどもたず、動詞に続く N/NP が意味の中核を担っている構文を軽動詞構文と見なしている。学習者が高頻度動詞 make を過剰使用するか過少使用するかについて、L1 背景の異なる学習者の作文コーパスからデータを検索し、英語 NS コーパス、L1 フランス語 NNS コーパス、L1 スウェーデン語 NNS コーパスを分析比較している。軽動詞としての make は、EFL 学習者は過少使用するばかりでなく誤用もする (前出:180)。Nesselhauf (2003:275-276) の所見では、L1 フランス語や L1 ドイツ語の EFL 学習者は make のエラーが多く、その一部は L1 転移で説明できるとしている。

2 データ・方法

2.1 コーパス

本研究では日本人大学生のEFL学習者におけるオーセンティックなMAKEの使用を見るため、コーパスを2種類使う。一つはICLEプロジェクトのコントロールコーパスとして構築された大学生の英語母語話者エッセイコーパスLOCNESSで、本研究では約17万語の米語の論文を使う。もう一つはInternational Corpus of Learner English (ICLE) のサブコーパスとして構築されたICLE-Jである。ICLEは約250万語の学習者英語電子コーパスで、L1別にEFL学習者の論文を構築した16種類のサブコーパスから成る。ICLE-Jは昭和女子大学の金子教授が構築したサブコーパスで、約20万語の日本人大学生の英語論文コーパスである。表2は両コーパスの総語彙数(トークン)と総エッセイ数である。

表2 使用コーパスの語彙数とエッセイ数

学習者コーパス	LOCNESS	ICLE-J
総語彙数(トークン)	168,314	200,827
総エッセイ数	207	363

2.2 方法

第1のステップは、*WordSmith Tools*を使ってMAKEの量的分析を行う。両コーパスにおけるMAKEの総出現頻度を求め、EFL日本人学習者のMAKEの過剰使用(overuse)や過少使用(underuse)を分析する。

第2のステップは、統語構造によってMAKEをMAKE+Noun/NP、causative MAKE、phrasal/prepositional phrase MAKE、idiomatic MAKE、other structuresのカテゴリーに分類し頻度を計算し、 χ^2 検定を使って過剰使用や過少使用を分析する。さらに、同様の手順でMAKE+Noun/NPの意味カテゴリー別に分析する。

3 分析・考察

3.1 学習者コーパスにおけるMAKEの総出現頻度

1.1で提示した表1でも明らかなように学習者コーパスにおいてMAKEは高頻度動詞であることが報告されているが、表3はLOCNESSとICLE-Jの両コーパスにおけるMAKEの総出現頻度である。表4は10万語あたりの正規化数値である。本研究では動詞だけを対象としているため、epoch-makingといった複合語は消去(zap)している。なお、LOCKNESSの数値はEdwin(2007:73-74)を使用している。

表 3 両コーパスにおける MAKE の総出現頻度

Verb	LOCNESS	ICLE-J
MAKE（消去前）	578	641
MAKE（消去後）	569	629

表 4 両コーパスにおける MAKE の総出現頻度（10万語あたり）

Verb	LOCNESS	ICLE-J
MAKE（消去後）	338.06	313.20

3.2 MAKE の統語的分析

以下に MAKE を統語カテゴリー別に分類し、LOCNESS や ICLE-J から抽出した実例を示す。

- | | |
|--|--|
| 1) MAKE+Noun/NP
(or passive construction) | 例：make progress, make a copy
allowances are not made, |
| 2) causative MAKE
(or passive construction) | 例：made it easier, made people think
are made to request, is made into |
| 3) phrasal/prepositional phrase MAKE | 例：make up |
| 4) idiomatic MAKE | 例：make it, make the most of |
| 5) other structures | 例：make sure |

表 5 は両コーパスにおける MAKE の統語的カテゴリー別の出現頻度と χ^2 統計測定の結果を示したもので、表 6 は10万語あたりの正規化数値を示している。

表 5 MAKE の統語的分析

	LOCNESS	ICLE-J	χ^2
1) MAKE+Noun/NP	292	356	0.07 (n.s.)
2) causative MAKE	241	234	5.07 (p<0.05) underuse
3) phrasal/PP MAKE	26	16	4.50 (p<0.05) underuse
4) idiomatic MAKE	6	22	6.59 (p<0.05) overuse
5) other structures	4	1	2.39 (n.s.)
MAKE の総出現頻度	569	629	1.75 (n.s.)
総語彙数	168,314	200,827	

表6 MAKEの統語的分析 (10万語あたり)

	LOCNESS	ICLE-J
1) MAKE+Noun/NP	173.49	177.27
2) causative MAKE	143.18	116.52
3) phrasal/PP MAKE	15.45	7.97
4) idiomatic MAKE	3.56	2.60
5) other structures	2.38	10.95
MAKEの総出現頻度	338.06	313.20

表5と表6からも明らかのように、日本人大学生は米国人の英語を母語とする大学生と比較すると、causative MAKEやphrasal/pp MAKEを有意に過少使用する傾向が見られる ($p < 0.05$)。一方、idiomatic MAKEを、有意に過剰使用する傾向が見られる ($p < 0.05$)。

表7 MAKE+NPの意味カテゴリー別出現頻度

	LOCNESS	ICLE-J	χ^2
light verb structure with MAKE	208	184	8.82 (p<0.01) underuse
money MAKE	41	6	32.85 (p<0.001) underuse
creative MAKE	40	166	56.94 (p<0.001) overuse
linking MAKE	3	1	1.39 (n.s.)
MAKEの総出現頻度	292	356	0.07 (n.s.)
総語彙数	168,314	200,827	

表8 MAKE+NP構文の意味カテゴリー別出現頻度 (10万語あたり)

	LOCNESS	ICLE-J
light verb structure with MAKE	123.58	91.62
money MAKE	24.36	2.99
creative MAKE	23.77	82.66
linking MAKE	1.78	0.50
MAKEの総出現頻度	173.49	177.27

表7はICLE-JのMAKE+NP構文の意味カテゴリー別の出現頻度について母語話者コーパスと比較したもので、表8は10万語あたりの正規化数値である。日本人英語学習者は軽動詞 ($p < 0.01$) やmoney MAKE ($p < 0.001$) を有意に過少使用している。これに対して、creative MAKE ($p < 0.001$) を有意に過剰使用していることがわかる。

4 結 論

本研究では次のことが明らかになった。

- (A) L1 日本語 EFL 学習者は causative MAKE や phrasal/pp MAKE を有意に過少使用し、idiomatic MAKE を有意に過剰使用する傾向がある。
- (B) L1 日本語 EFL 学習者は軽動詞や money MAKE を有意に過少使用し、creative MAKE を有意に過剰使用する傾向がある。

更に上記の各構文について、特に軽動詞の正用やエラーの分析を行う必要があるが、本研究では立ち入ることができなかった。今後の研究で取り上げたい。

注

- 1) NS : 英語母語話者、FRE : L1 フランス語、SPA : L1 スペイン語、FIN : L1 フィンランド語、FINSW : フィンランド系スウェーデン語、SWE : スウェーデン語、DUTCH : オランダ語、GERM : ドイツ語
- 2) 統語的分類と意味的分類でずれる場合もあるため、100%統語的分類とはいえない。

参考文献

- 相沢佳子 (1999) 『英語基本動詞の豊かな世界—名詞との結合に見る意味の拡大』 東京 : 開拓社。
- Allerton, D. J. (1982) *Valency and the English Verb*. London: Academic Press.
- Allerton, D. J. (2002) *Stretched Verb Constructions in English*. London and New York: Routledge. Routledge Studies in Germanic Linguistics.
- Altenberg B. and Granger, S. (2001) The grammatical and lexical patterning of MAKE in native and non-native student writing. *Applied Linguistics* 22 (2): 173-194.
- Ballier, B. (2003) Les collocations en DO et le statut de verbe léger. Rouen: CETAS. Article paru dans le cadre de la journée sur DO. Université de Pour et des Pays de L'adour. 2003.
- Bahns, J. and Eldow, M. (1993). Should we teach EFL students collocations? *System*, 21 (1), 101-114.
- Collins Cobuild English Grammar* (1990) London and Glasgow: Collins.
- Cowie, A. (2005) *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Oxford University Press.
- De Cock, S. and S. Granger (2004) High frequency words: the bête noire of lexicographers and learners alike. A close look at the verb *make* in five monolingual learners' dictionaries of English. In William, G. and S. Vessier (eds.) *Proceedings of the Eleventh EURALEX International Congress*. Université de Bretagne-Sud: Lorient. 233-243.

- Edwin Borgatti, E. (2006) The Use of the Verbs 'Make' and 'Do' by French - and Dutch-Speaking EFL Learners — A Corpus-based Study. MA dissertation. Université catholique de Louvain.
- Gilquin, G. (2000/2001) The Integrated Contrastive Model. Spicing up your data. *Languages in Contrast* 3(1): 95-123.
- Gilquin, G. (2006) The verb slot in causative constructions. Finding the best fit *Constructions* SVI-3/2006 (www.constructions-online.de, urn:nbn:de:0009-4-6741, ISSN 1860-2010).
- Granger, S. (1998) The computer learner corpus : a versatile new source of data for SLA Research. In S. Granger. 1998. *Learning English on Computer*. London & New-York. Longman. 3-18.
- Howarth, P. (1998) The phraseology of learners' writing. In Cowie, P. (ed.) *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Oxford University Press. 161-186.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum, (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Longman Grammar of spoken and written English* (1999) England: Longman.
- Nesselhauf, N. (2003) The Use of collocations by Advanced Learners of English and Some Implications for Teaching. *Applied Linguistics* 24 (2): 223-242.
- Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radford, A. (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ringbom, H. (1999) High frequency verbs in the ICLE corpus. In Renouf, A. (ed.) *Explorations in Corpus Linguistics*. Amsterdam and Atlanta: Rodopi. 191-200.
- Sinclair, J. (1991) *Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford: Oxford University Press.
- Sinclair, J. and A. Renouf (1988) A lexical syllabus for language learning. In Carter, R. and M. McCawley (eds.) *Vocabulary and Language Teaching*. London: Longman. 140-160.
- Stubbs, M. (2002). Words and phrases: corpus studies of lexical semantics. Oxford: Blackwell Publishing Ltd. [南出康世・石川慎一郎 (監訳) (2006) 『コーパス語彙意味論—語から句へ』東京：研究社]
- Sugiura, M. (2002). Collocational knowledge of L2 learners of English: A case study of Japanese learners. In T. Saito, J. Nakamura & S. Yamazaki (eds.), *English Corpus linguistics in Japan*. Amsterdam: Rodopi B.V. 303-323.
- Svartvik, J. and O. Ekedahl (1995) Verbs in private and public speaking. In Arts, B. and C. Meyer (eds.) *The Verb in Contemporary English: Theory and Description*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, L. (1985) Lexicalization patterns. In T. Schopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description III*. Cambridge: Cambridge University Press. 57-149.
- 田中茂範他 (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』東京：大修館.
- Tobin, Y. (1993) *Aspect in the English Verb: Process and Result in Language*. London and New-York: Longman.
- Trask, R. (1993) *A Dictionary of Grammatical Terms in Linguistics*. London: Routledge.

- Wienold, G. (1995) Lexical and conceptual structures in expressions for movement and space. In Egli, U., P. Pause, C. Schwarze, A. von Stechow and G. Wienold (eds.) *Lexical Knowledge in Organization of Language*. Amsterdam: John Benjamins. 301-340.
- Wong-Fillmore, L. (1976). The second time around: Cognitive and social strategies in second language acquisition. Ph.D dissertation. Stanford University.
- Wray, A. (2005). Looking at the WHY in phraseology: a psycholinguistic perspective on patterns in text. In Cosme, C., Gouverneur, C., Meunier, F. & Paquot, M. (eds.), *Phraseology 2005*. 23-24. Louvain-la-Neuve: CECL/CELEXROM, Universite Catholique de Louvain.

謝辞

本研究は平成18年度に関西大学在外研究員として行った研究の成果の一部である。快く受け入れてくれた CECL の創始者である所長の Dr. Granger、副所長の Dr. Meunier、研究員の Dr. Gilquin の貴重なご指導に感謝申し上げます。また、ICLE-J の使用をお許しくださった昭和女子大学の金子朝子教授にお礼を申し上げます。1 年間にわたる在外研究の機会と財政的支援を与えていただいた関西大学および関係各位に心からの謝意を表したい。本論文に不備な点があるとすれば、全て筆者の責任である。